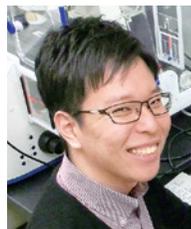




新規に発見された paxillin の点変異による 癌細胞の浸潤・遊走の阻止

～『がんと共存する』新しい治療アプローチを目指して～



山口大学医学部医学科 4 年生（山口大学大学院医学系研究科・分子細胞生理学講座）

岡本 高史

（第 68 回 日本生理学会中国四国地方会 奨励賞）

この度は、日本生理学会中国四国地方会奨励賞という、大変名誉ある賞をいただくことができ、誠に光栄に存じます。私の親族には、がんになった者が多くおります。特に、その中に、私が子供の頃から私のことを気にかけてくださり、私が浪人した時にも医師になりたいという私の夢をいつも応援して下さった方がいました。その方は、私が浪人しているときに肺癌になり、手術も行ったのですが、癌細胞がまず顔面のリンパ節へ転移し、その次は骨転移、最後には骨髄も侵され、亡くなりました。72 歳でした。「癌の転移」がこれほど憎いと思ったことはありませんでした。そして私は、必ずや医学部に入学して、自分自身の手で癌の転移に関わるメカニズムを解明し、癌に苦しむ方々を救いたいと思い、「自己開発コース」という半年間の研究プログラムが設けられている山口大学医学部医学科に入学しました。三年生になり、「自己開発コース」が始まり、同大学の分子細胞生理学講座で、長年の念願であった癌の転移と浸潤に関わるメカニズムの研究をさせていただけることになりました。その年の大晦日から翌日の 1 月 1 日に、チロシンリン酸化部位を選択的に点変異させた paxillin を癌細胞に過剰発現させ、その癌細胞を使って遊走実験を行い、癌細胞の遊走を制御する paxillin のチロシンリン酸化部位を同定することにはじめて成功したときの感動を今でもつい昨日のこのように覚えています。このよ

うな結果を出すことができ、奨励賞を受賞することができたのは、第 67 回日本生理学会中国四国地方会奨励賞を受賞された、現在同大学の医学部医学科 5 年生の松永一真先輩のご指導のお陰です。私が最も尊敬する松永先輩に続き、2 年連続で奨励賞を受賞できたことを心より嬉しく思います。

現在、研究カリキュラムが終了後も実験を続けております。今後も、臨床の勉強を行いながら、この研究を続け、浸潤と転移を阻止しがんを『良性化する』ことによってがんと共存するアプローチの実現を目指したいと思います。また、臨床医としての将来も、難病に正面から立ち向かい、その分子機構を解明する研究を行うことにより根本的な治療法を開発できる医師になることを目指して、日々精進してゆく所存です。

最後に、研究を指導して下さいました山口大学大学院医学系研究科・分子細胞生理学講座の小林誠教授をはじめとする先生方、そしてずっと応援してくれた私の家族に深く感謝を申し上げます。

略歴

- 2013 年 4 月 山口大学医学部医学科へ入学
- 2015 年 7 月 山口大学医学部医学科 3 年生の自己開発コースにより、山口大学大学院医学系研究科・分子細胞生理学講座に所属